



排水

感情がないのではない。
立ち上がる前に、処理されている。

理不尽に触れた瞬間、心は一度だけ震える。
だがその震えは、表に現れない。

怒りにも、悲しみにも形を与えられず、
ただ「ここで滞らせない」という判断だけが残る。

それは感情の欠如ではなく、
滞留を許さない構造である。

それは無関心ではない。
鈍さでも、回避でもない。

場の密度を測り、
衝突の広がりを読み、
ここで何を出せば損耗するかを瞬時に判断している。

声を荒げないのは、抑えているからではない。
荒げた先の「消耗の形」を、すでに知っているからだ。

この排水は、防衛では終わらない。

感情が場を変えないと知ったとき、
届かない距離を理解したとき、
内側に別の回路が形成される。

怒りは分析へ。
悲しみは俯瞰へ。
悔しさは沈黙へ。

ここでは、感情は否定されない。
ただ「残さない形」に変換される。

理不尽に触れた瞬間、
内側の配管が開く。

流れる。
残さない。
そして、形だけが保たれる。

やがてそれは技術ではなく、
その人の構造そのものになる。

排水を持つ構造は、壊れにくい。

場を荒らさず、
関係を崩さず、
自らの輪郭を保ち続ける。

だが同時に、
必要な痛みまで流してしまう。

「傷ついた」という事実すら、
構造の中で処理される。

強さと欠落は、
同じ回路から生まれている。



守ったのは感情ではない。

存在だった。



Edition — 存在の芯
別景：排水

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026